

ようやく、朝夕が過ごしやすくなりました。

現在会員登録数 4,528 人さま。次号は 10 月 21 日発行の予定です／

＋-----◇◆◇ 目次 ◇◆◇ -----＋

【1】お知らせ

【2】コラム

《1》この本読んだ？

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

《3》子どもの本の珠玉のことば

《4》行って来ました！

《5》宮川健郎 私の出会った児童文学者たち

《6》富安陽子 腕だめし STORY COMPE. 2025

【3】全国のイベント紹介

【4】プレゼント

＋-----＋

【1】お知らせ

●「おはなしモノレール」参加申込受付中

大阪モノレール「万博記念公園駅」から「彩都西駅」まで、貸切モノレールに乗って絵本やおはなしを楽しみ、彩都の会場で人形劇を観るイベントです。

◇開催日：10月26日（日）

Aコース＝12：15～14：15、Bコース＝13：25～15：25

◇対象：5歳～小学3年生（保護者同伴） ◇定員：240人

◇参加費：一人500円（子ども・大人同額）

◇申込締切：10月6日（月）＜定員を超えた場合は抽選します＞

※詳細、お申し込みは↓

http://www.iiclo.or.jp/03_event/01_kids/index.html#ohanashimonorail

●「ご寄付をお願いします」 当財団の運営を応援いただける個人、法人の皆さまからのご寄付を募っています。寄付金は、当財団が行う講座・講演会など、さまざまな事業経費に充てさせていただきます。

※詳細は → http://www.iiclo.or.jp/donation_10th.html

※Syncable（シンカブル）＝継続寄付（毎年／毎月）、単発寄付が選べます。

→ <https://syncable.biz/associate/19800701>

【2】コラム

《1》この本読んだ？ Yasuko's & Takeo's Talk

『オオカミは海をめざす』 三田村信行/作 北沢夕芸/絵 童心社 2025年7月 対象年齢：小学校高学年以上

*今回のゲストは当財団理事の宮川健郎さん（T）です。

*作品の最後まで書いています。

あらすじ：中学生のユーキは、家族と住めない子どもたちとともに、ユーキ

の両親が運営する「ノア・ハウス」に住んでいる。ある日、イリヤという年上の少年が「ノア・ハウス」にやってきて、少しずつ友だちになる。しかし、イリヤには、時に狼に変身するという秘密があった。イリヤは村の奥にあるベートの深い森へ行き、そこで夏の間だけひそかに森の中で暮らしている人たちに出会う。そこには、遺跡があって、壁にはオオカミが海へ行く絵が描かれていた。イリヤはその人たちに、イリヤこそが待っていた人だと言われる。その森から戻ったイリヤは、ユーキに森での体験を話す。

Y：人がオオカミに変身する人狼物語。最後、人狼のイリヤがどうなるのかと思って一気に読みました。

T：舞台はヨーロッパの村のようでもありながら、書かれてはいなくて、いわば無国籍の児童文学です。

その村にある、ノアの箱舟をイメージした「ノア・ハウス」にイリヤがやってきます。イリヤや「ノア・ハウス」の子どもたちの状況は、誰もが「生きにくさ」を抱えている現代社会を反映しているように思います。特に、オオカミであるというありのままの姿が周りの人たちから受け入れられないイリヤは、「生きにくさ」がわかりやすい形で描かれています。

Y：いきなり作品の結末に飛びますが、結末で、イリヤは、仲間たちとともに森の中にできた＜海＞へと去っていきます。つまり、人間界では生きられないと判断します。これをどう解釈したらいいんだろうと思いました。

T：イリヤは、自由を求めてユートピアに向かいます。これは、人狼にとって、人間社会は生き続けていける場所ではなかったと読めます。

ここで、重要になってくるのが、イリヤの親友になり、イリヤを見送ったユーキです。ユーキはこの作品全体の語り手で、読者が寄り添える人物になっています。

Y：私もユーキがいてよかったと思いました。読者は、ユーキとともに、イリヤたちが生きられなかった人間社会の現実を背負って生きてくことになるからです。

T：そして、結末で、ユーキが「ぼくにとっての＜海＞は、いつあらわれるのだろうか。」と言うことで、誰もが自由に向かって旅立つ場所として＜海＞がイメージできるようになります。

Y：とはいえ、本当にこの結末でよかったのかなあと今も思い続けています。

T：ここは議論の分かれるところかもしれません。

Y：おもしろかったところとして、謎解きの要素もありました。ヒントはあるものの、ベートの森で暮らしている人たちの正体や、遺跡の意味などです。

T：恋愛の要素も読ませるところです。イリヤは、ベートの森で暮らしている少女エマと恋に落ちますが、エマに恋するやはり森の住人のアランは、イリヤを陥れようとします。そしてアランの幼なじみのナイジェルは、アランに恋心を抱いています。

Y：イリヤや「ノア・ハウス」の子どもたちが、学校の子どもたちや村の人たちから偏見の目を向けられるところも心に残りました。

T：いくつか参考文献が挙げられていますが、ヨーロッパの伝承をうまく取り込んでいる点も興味深かったです。

ともかく、1939年生まれのベテランの著者が新しい挑戦をして、二段組み 335 ページにもわたるおもしろい長編を書かれたことに心からの拍手を送りたいと思います。

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

レールを歩くということ

農学校教員の〈私〉は、生徒二人が怪訝そうに見つめるなか、手帳を携えて朝の野に出て行きます。線路伝い、レールに沿って歩いていくと、工夫が冷笑しながら〈私〉を追い越し、また別の工夫はうしろから手帳をのぞき込もうとします。似鳥さんの泊まっている家の前で手帳を広げ、虎戸の家では格子からこっちを見られたかもしれないと気にしつつ、それでも〈私〉は、〈一向差支へはない〉〈一向気取ったわけじゃない〉〈しなければならなくてしてゐるんだ。けれどももしこれがしんとした青黝い空間でならば全くどんなにいいだろう。それでも仕方ない〉と思いながら歩を進めます。

向こうから、顔見知りの女の人と子どもがやってきて、他愛のない会話を交わして行き過ぎます。すると、早池峰の西隣にある群青色の薬師岳の稜が浮き出してきます。さらに東へ向かい、線路沿いにきた工夫や黒沢と出会ったのちには、〈南の方はそら一杯に霽れ〉〈東には敏感な空の白髪が波立つ。光の雲のうねと云った方がいゝ、南はひらけたトウクォイス、東は銀の雲のうね、書いて行かうか。けれどもどうも斯う云ふ調子にのった語は軽薄でいけない。それでもやっぱり仕方ない〉と〈私〉は考えます。そして、鉄橋を渡った向こう岸には野菜畑が広がり、そこで黒光りの馬がはねあがり、竜のような赤い眼で〈私〉を見下ろすところで物語は終わります。

「歩行しながら通り過ぎる家々からの視線を常に気恥ずかしく感じ取る心情と空を眺めながら歩き感じる開放感が対比的に描かれていること」(奥山文幸「山地の稜」平成19年)が本作の特徴であり、手帳と万年筆を持った〈私〉が、朝の沿線を独白とともに克明にスケッチする描写に「心象スケッチの方法の成立の原初的な姿」(押野武志「初期短編綴等Ⅱ」平成15年)が見られるとも指摘されています。

ところで、〈私〉が歩くのは軽便鉄道の線路沿い、レールの上です。〈私〉はレールを介して人々と出会い、言葉を交わし、そして分かれていきます。明治以降、国家事業としての鉄道敷設により、線路は国内隈無く行き渡り、駅を中継点にしてさまざまなものを繋ぎました。その一方、線路は都市と農村、中央と地方といった地理的分断を生んだとも言えます。他者から見られることへの過剰な自意識が垣間見える〈私〉が、レールや鉄橋という場でさまざまに葛藤するのも、他者との接続・切断を暗示しているのかもしれない。(ペ吉)

(本文の引用は、ちくま文庫『宮沢賢治全集8』によりました。)

《3》子どもの本の珠玉のことば 75

「おれの頭は、どうかしたのかな。たったいま、会社から帰ってきたばかりだというのに、家にはもう、ちゃんとおれがいて、おまけにゆかたなんか着こんで、くつろいでいる。いったいこりゃあ、どういうわけなんだ？」
「なにをぶつぶついつてるんだ。きみはだれだ！だまって他人の家にあがりこむなんて、失礼じゃないか」

(「おとうさんがいっぱい」『おとうさんがいっぱい』 三田村信行/作 佐々木マキ/画 理論社 1975年5月 p.89)

対談で紹介した三田村信行の代表作の一つともいえる不条理児童文学作品集『おとうさんがいっぱい』の中の表題作からの引用です。

冒頭は、トシオの家にはおとうさんがいるにもかかわらず、友だちに会った

から遅くなるとママに伝言を頼むというおとうさんからの電話がかかってくるところから始まります。そして、いとこのミミ子からおとうさんが3人になったという電話がかかります。そこで、おとうさんが複数存在するというこの現象は、トシオの家だけではないことがわかります。

そして、引用の場面になり、おとうさんが帰ってきて、家にいるおとうさんと出会い、自分こそが「この家の主、トシマ・タツオだ」と主張し合います。なんと、このあと、電話をかけてきたもう一人のおとうさんが帰ってきて、トシオの家には3人のおとうさんがいることになり、おかあさんは、睡眠薬を飲み続けて、3人のおとうさんを避けます。この社会現象を止めるべく、ついに、トシオの家にも役所から調査官がやってきます。調査官の前で、トシオは判定者となり、おとうさんたちがそれぞれアピールをして、一人だけおとうさんが選ばれます。

何とも不思議な話ですが、そこには、トシオやおかあさんの前で、「おとうさん」という威厳が何の意味ももたなくなる様子が描かれ、密かな笑いを誘います。トシオの3人のおとうさんの選び方は、実はあみだくじ。そして、おかあさんは一人になるまでは、身を潜めていたと言い、こんなところにも、おかあさんや子どもの生きる知恵、たくましさを感じられます。

『おとうさんがいっぱい』には、この作品のほか、「ゆめであいましょう」「どこへもゆけない道」「ぼくは五階で」「かべは知っていた」が入っており、どれも、主人公の子ども自身の存在の不確かさや父親の威厳の失墜が描かれており、今読んでも読みごたえのある作品だと思いました。佐々木マキの絵が、作品の内容と呼応して、抽象的かつ哲学的な思考へと誘っています。(Y)

《4》 行って来ました！

京都国際マンガミュージアムで11月25日まで開催されている企画展「マンガと戦争展2」に行ってきました。「戦後70年となる2015年に、京都国際マンガミュージアムで制作・開催した「マンガと戦争展」の“続編”であり、戦後80年の節目に向けて企画された」(京都国際マンガミュージアムHPより)とあり、「戦後80年」とは、誰にとっての、どのような体験や記憶を意味しているのか。「戦争マンガ」の多様性と現在性にふれながら、一緒に考えてみませんか。」と問いかけられている展示です。

展示室内に入ると、まず、「4象限で示すテーマごとにおける戦争マンガの紹介」が現れます(象限とは、平面を直交する二直線で仕切ってできる四つの部分の一つ一つ)。10年前の展示で紹介された「原爆」「特攻」「満州」「沖縄」「戦中派の声」「マンガの役割」の6つのテーマに加えて、今回は、新たに、「食」「外国」の戦争「マンガの表現」「新・沖縄」が加わっています。

新たな4つのテーマは、両端に矢印がついた線のクロスとその矢印の先に言葉がある絵(たとえば、「食」であれば、「前線」と「銃後」が両端に、「食の中の戦争」と「戦争の中の食」が両端にある)が床に描かれています。そして、その四角い絵を囲んで、それぞれの言葉に即したマンガの主要な場面が印刷された大きなのれんが四角く吊り下げられています。例えば、「戦争中の食」と「銃後」の交わる場所にあるマンガは、おぎわゆき『あとかたの街』で、「前線」と「食の中の戦争」の交わる場所にあるマンガは、あべ善太/作、倉田よしみ/漫画『味いちもんめ』というようにです。マンガ作品を読みながら、戦争の多様な描かれ方を知ることができ、自分の中にある「戦争観」がゆさぶられます。

「外国」の戦争のテーマのところには、パレスチナやウクライナの作品があり、マンガがいかに「現代」を描いているかが伝わります。また、「現代沖

縄の基地問題を取り上げている作品を意識的に紹介した」という「新・沖縄」のテーマに関しては、沖縄出身の二人のマンガ家、しんぎとけんしん（新里堅進）と大白小蟹の作品が紹介されていると同時に、次の部屋には原画も展示されており、見ごたえがありました。

紹介されているマンガは、手に取って読めるようになっており、私と同じように、作品を手にとって読みふけている人を多く見ました。マンガの表現できる可能性の大きさ、深さを改めて感じた展示でした。（K）

京都国際マンガミュージアム <https://kyotomm.jp/>

《5》 宮川健郎 私の出会った児童文学者たち 第23回

第5章 古田足日先生

その3 社会にひらく「散文」（中の前半）

昨年（2024年）は、古田足日・田畑精一の絵本『おいしいのぼうけん』（童心社1974年）の刊行50周年でした。私が古田足日先生（1927～2014年）に出会ったのは、『おいしいのぼうけん』が刊行された、つぎの年。私は19歳でした。

この連載では、「思い出話」を語るだけではなく、私の出会った児童文学作家や評論家の仕事に対する考察や、さらには、そこから、現代児童文学史のとらえ直しも試みます。ご愛読ください。

<本編はこちらから>

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/watashinodeatta.html

《6》 富安陽子 腕だめし STORY COMPE. 2025

「日産 童話と絵本のグランプリ」の再開を待つ間、童話を「創る場」と、童話を「読む場」を提供したいと考え、本コーナーをメルマガN0.179からスタートしました。

7月20日に、2つのキーワード「アイスクリーム」「かばん」を入れた創作童話の募集を開始し、8月末までの応募期間に46編の作品をお送りいただきました。応募くださったみなさま、ありがとうございました。

その中から、富安陽子理事長が選んだ5作品を発表します！

- A「アイスやさんの ふしぎなカバン」
- B「あことおねえちゃん」
- C「かばんの中のアイスクリーム工場」
- D「ちいさなライオン」
- E「みちばたー」

こちら↓に作品を公開しています。作者名は伏せています。

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/storycompe.html#181_5sakuhi

読んで、いちばんおもしろいと思った作品にぜひ投票してください！

投票はどなたでもしていただけます。（一人1作品のみ）

◇投票期間：9月20日（土）～10月15日（水）

投票はこちらから→ <https://forms.gle/zegApnkgcJrZxtzA7>

みなさんの投票を集計し、上位2作品を10月21日発行のメールマガジンN0.182で発表します。同じ条件で書いた、富安陽子理事長の作品も公開しま

す。お楽しみに！！

<詳細はこちらをご覧ください>

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/storycompe.html

【 3 】 全国のイベント紹介

● 茂田井武 原画展

場所：大阪府立中央図書館 1階展示コーナーA

期間：9月19日（金）～10月8日（水） 入場料：無料

※休館日あり、開館時間にご覧いただけます

主催：大阪府立中央図書館指定管理者 長谷工・大阪共立・TRCグループ

上記イベントの詳細およびその他の講座・講演会、展示会、公募情報については、こちらからご覧ください。↓↓

http://www.iiclo.or.jp/03_event/04_other/index.html

※イベント情報をお送りください。当財団HPに掲載させていただきます／

【 4 】 プレゼント

今号のコラム《1》「この本読んだ？」で紹介しました『オオカミは海をめざす』をプレゼントします。ご希望の方は、プレゼント応募フォームから、(1)お名前 (2)郵便番号・住所 (3)電話番号 (4)メールアドレス、よろしければ (5)このメルマガのご感想をお書きのうえ 応募ください。

応募フォーム⇒ <https://forms.gle/uL2TpNhMEYWJpnQ9A>

締切は10月10日（金）、当選発表は発送をもって代えさせていただきます／

編 | 集 | 長 | の | つ | ぶ | や | き |

秋の定番は、読書、スポーツ、行楽と盛りだくさん。まだ読み始めている本、暑さに負けて休憩中のウォーキング、思い切った遠出と気持ちばかりが先走ります。短いと言われる近頃の秋。ひとまず、食に走ろうかと思案中です。(TA)

みなさまのご意見・ご感想をお聞かせください。下記メールアドレスまでお願いします。

原則として返信はいたしませんのでご了承ください。

●このメルマガジンは、ご登録いただきました皆様に配信しています。

●配信の登録・解除・変更は、

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/index.html

●このメールの送信アドレスは配信専用です。

●記事の無断転載はご遠慮ください。

発行：一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団 <http://www.iiclo.or.jp/>

〒577-0011 大阪府東大阪市荒本北 1-2-1 大阪府立中央図書館内

TEL：06-6744-0581 FAX：06-6744-0582 E-mail：office@iiclo.or.jp
